

## 西欧中世文書の史料論的研究：平成20年度研究成果 年次報告書

岡崎，敦  
九州大学大学院人文科学研究院：助教授

山田，雅彦  
京都女子大学文学部：教授

徳橋，曜  
富山大学人間発達学部：教授

高橋，一樹  
国立民族博物館：助教授

他

<https://hdl.handle.net/2324/1932626>

---

出版情報：2009-03  
バージョン：  
権利関係：

## リテラシー研究の最前線 ―西欧中世史から―

岡崎敦

## はじめに

「リテラシー」という用語は、現代社会において、非常に多義的に用いられるが、他方、この英語用語に厳密に対応する単語は、奇妙なことに、たとえばドイツ語やフランス語には存在しない。対象としての「テキスト」と同様、解読の諸条件としての「リテラシー」のあり方自体が、個別研究の対象となり、同時に、問題関心の前提となるという意味で、「リテラシー」研究は学問自体のあり方を映す鏡ともいえる。

九州歴史科学研究会との共催で開かれたリテラシーをめぐるシンポジウムの趣旨説明を兼ね、ここでは、西欧中世史領域における近年の研究動向について概観する。中世初期の研究動向とミュンスター共同研究という、ここ四半世紀のもっとも重要な動きに関しては個別報告が別個に設定されていることもあり、本稿では、やや大きな角度から、リテラシー研究の基本的な論点と主たる研究動向を主として整理したい。この際、歴史学、さらには学問全般に看取される問題関心の変容も意識することとする。以下、まず基本的な論点を整理したのち、英米学界、大陸学界それぞれの動向を、代表的な論考をたどりながら概観する。

## 1. 基本的諸論点

リテラシー近年のリテラシー研究を特徴づける性格として、以下の諸点を指摘したい。

第一は、リテラシー概念の柔軟化であり、三点を指摘することができる。一つは、国家（国民）的義務教育制度が発明した「全般的リテラシー」に対立する、「実践的リテラシー」という次元の発見であり、後者は当然ながら常に「複数形」で語られる。二つ目は、高度に規範化、洗練されたコードの体系としての「リテラシー」と区別される、日常生活や仕事の必要に「埋め込まれた」「実務的リテラシー」の同じく発見である。第三は、「リテラシー」の対象を文字や言語テキストに限定することなく、広く口頭所作、画像、音声、さらにはそれらの複合形態・現象を考慮に入れることである。とりわけ、西欧中世社会は、「（そのようなものが存在するとして）完全な文字社会」でもなければ「無文字社会」でもなく、文字とその他の記号体系との相互関係が、もっとも重要な研究対象となる。

第二は、メディア論、コミュニケーション論への接合である。ここでも、以下の三点が重要である。一つは、文字等のメディアや、そのコード解読としてのリテラシー条件を、発信者のメッセージを「透明なやり方で伝達する器あるいは技術」とみなすことの拒否である。「テキスト」は、メディアやリテラシー環境が持つ固有の性格との関わりで、生成し、利用され、変容しながら、今日まで伝来してきた。そこでは、メディアの物質性や、

テキスト流布の過程などもまた問題となる。二つ目は、テキストの受け手に関わる。「受容理論」とシャルティエの「読書行為」論を経て、テキストの意味は、なにより受け手の行為と彼（ら）の置かれた環境によるという認識が一般的になった。たとえば、「宗教改革思想を農民は正しく理解した」などの言説が持つイデオロギー性が暴露されたわけである。そこから、最後に、メッセージの生成から受容までの全過程を包含する「コミュニケーション空間」というキーワードが生まれる。そこに参入する人間（集団）は、なんらかの認識コードを共有するとともに、その行為が不断に関係のあり方を再編するが、そこでは、異なるコード体系のぶつかり合いや照合が繰り返される。

最後に、このような関心の変容は、歴史学全般に見られる深い変容を反映しているようにも見える。第一に、本質論的発想の忌避と関係論への重心の移動である。「テキストの本質」ではなく、その「我がものとする利用」に関心が集まることは、結果的に、歴史家の営みの立場性を浮き彫りにし、複数の歴史像の構築（物語り）へも導きもするが、同時に、実証研究レベルでも、表象の次元を独立させ、その解読を目指す研究の隆盛を促した。歴史（編纂）の歴史、紛争解決と合意形成などの問題群は、共通して諸力のせめぎ合いを焦点としており、その端的な現れであろう。第二に、史料を、「現実が表現される器」ではなく、歴史家による「過去の痕跡」としての認識行為の所産としてとらえる史料論の動向がある。そこでは、個々のモノや現象の生成から、利用、管理、廃棄、忘却にいたるすべてのあり方が「歴史情報」として研究されるが、リテラシーとの関連で重要なのは、史料読解の妥当性に関わる議論は、同時代におけるテキスト生成および認識、すなわちリテラシー環境論と、同じ構図に位置するという点であろう。第三に、大理論からの演繹（あるいは機械的な適用）にかわり、細部の解読がブームとなった。一般化への警戒は、現実表象と解釈の多様性の容認と表裏一体であり、マイクロ・ストリアと「厚い記述」へと促すであろう。

以上のような状況は、西欧中世研究の「常識」を想起するとき、その革命的な性格をあらわにする。伝統的に、この時期の *litteratus* とは、ラテン的キリスト教教養（キリスト教色に塗り上げられた古典古代教養とその中世における変容物）の担い手である聖職者 *clerici* と同義とされ、西欧中世文化研究とは、聖職者である教養人が操るラテン語テキスト研究であった（本質的には注釈）。これと裏腹の関係にあったのが教会史研究の伝統で、そこでは、宗教エリートによる宗教運動（その最も先鋭なかたちが、隠修士をはじめとする広義の修道制研究や、グレゴリウス改革をはじめとする教皇中心の教会改革運動である）、および宗教思想研究（のみ）が中世教会史の本道とみなされた。歴史は、つねに非日常を生きる中央のエリートによって担われる「本質」が、（不完全なこの世における）いびつな日常を克服していく過程（この世の意味と終末論）として提示されるのである。そこには、地域史や民衆史的発想は、本来的に入り込む余地がない。したがって、西欧中世領域における問題関心の刷新とは、文化史の再定義や人類学的歴史の影響をはじめとする学問自体の深い変容を背景とし、なにより「教会史から宗教史へ」と呼びなわされる動

きと連動していたわけである<sup>1</sup>。

## 2. 英米学界における動向

広義のリテラシー研究を振り返るならば、英米の学問・知的世界の重要性を無視することはできない。実は、リテラシー研究の歴史は歴史学研究の有効性自体の有効性自体を問う歴史でもあったが、ブリッグスによれば、重要な論点は三つある。一つは、史料はなにを語っているのかという問いであり、史料とそのコンテキスト問題と言い換えることができる。二つ目は、リテラシーを「強力なイデオロギーを含意する複雑な文化現象」としてとらえ、それは個々「個別の時空場によって多様なかたちで現象する」という認識である。最後に、全般的には、形態論的 *formalist*、および機能論的 *functionalist* アプローチが存在するとしても、歴史学は後者の視点が優越するという確認である。

リテラシーへの関心は、1950-60年代に、人類学や社会学からのインパクトを受けて広まったと考えられる。ハヴロック、マクルーハン、グディらの研究はいずれも、文字や活版印刷術などのテクノロジーが、人間の思考様式や社会関係の変容を引き起こす過程を論じたが、そのもっとも強力な主張者であるオングも含めて、彼ら「強い理論」派の議論はやや過度な一般論（文明論）へと傾斜していた。これに対して、すでに受容理論や解釈学の影響を受け始めていた中世研究において、「弱い理論」派（一般化ではなく、個別の解釈のための準拠枠として理論をとらえる）の立場から、個別研究が現れ始めたのは70-80年代であった。重要な論点ごとに、概観してみよう。

第一に指摘せねばならないのは、実践的リテラシーの次元の発見である。中世末期の俗人リテラシーを論じたパークスは、先駆的な諸業績のなかで、「読者」を「職業的読者」、「教養ある読者」とともに「実践的 *pragmatic* 読者」に分類した。西欧における本格的なリテラシー社会への突入は、権利証書や裁判などの実務的な現場でまず進行したと主張するクランチの著名な研究や、中世初期の俗人リテラシーの再評価の大きな動向をリードし続けるマッキテリク学派の諸研究も、共通の思想風土から生まれたものと考えられる。

第二は、コミュニケーションを「解釈行為」としてとらえるストックに代表される潮流である。ストックは、異端研究のなかで、オラリティ、リテラシーに加えて、テクスチュアリティという第三の次元を導入し、リテラシーは、これを挟む二つの領域を解釈する領域とみなす。さらに、このような解釈行為の場として、テキスト共同体、あるいは言説 *discourse* 共同体を概念化して、解釈学的な立場からのコミュニケーション研究の水準を一挙に高めた。このような立場にたつ類似の重要な研究としては、グリーンとスピーゲルの俗語文学研究が思いつく。後者は、フランス語による歴史テキストを対象に、古典的枠組

<sup>1</sup> ただし、非日常にとりわけ強い関心を寄せる一群の宗教人類学は、伝統的な教会史研究とむしろ親和関係にあるという逆説にも注意せねばならない。この点は、神話や儀礼（のみ）に関心を寄せがちというアメリカと日本の人類学との関わりでは、とりわけ注意を要する。

みのなかにあった「歴史」というジャンルの変容について論じている。前者は、ドイツ語テキストについて、「聞くこと」と「読むこと」をキーワードとする体系的研究だが、議論は俗語の文字化と「虚構」の生成の関係にまでおよぶ。

最後は、モノとしての書物研究の隆盛である。テキストの物理的存在形態は、「言説編成」や「読み行為」と直接関係する問題であることは、パークスやサンガーの分かち書きや黙読研究を想起すれば、明らかであろう。

90年代以降は、政治史の復権とともに、新たな政治文化論が百家争鳴だが、リテラシー研究との関係でも、ギヴンの異端審問調書研究や、グリーンの中世末期イングランドの法や宗教運度の研究（「真理とはなにか」）は、文字と権力の問題を正面から問うものとなっている。

### 3. 大陸の研究動向

大陸におけるリテラシー研究は、英米学界の圧倒的な影響を受けながら、やや不均等な見取り図を提示しているように見える。たとえばフランスにおいては、用語の不在（ごちない「書き物の文化」*histoire de l'écrit* という表現で包括される）に象徴されるように、まとまった動向を析出すること自体やや困難にみえるのに対して、ドイツにおいては、80年代後半から、巨大な野心的プロジェクトが進行し、90年代末からはオランダにおいて同様の共同研究が継続中である。前者は岩波報告の直接の検討対象であり、ここでは、後者のプロジェクト発足に際してリーダーであるモステルトが、また、ミュンスター共同研究終了後のドイツ学界を念頭にクッヘンブッフが、それぞれまとめた研究の総括と展望を紹介することとしたい。

1) 1999年からユトレヒト大学を中心として開始された「中世リテラシー」研究は、ドイツのアルトホーフ、イギリスのクランチ、マッキテリク、イタリアのペトルッチなど、この領域の研究を代表する欧米の研究者たちとの共同作業により、研究の射程をさらに拡大、深化させている。しかしながら、現在までの研究活動は、プロジェクト開始の段階ですでに構想されていた射程のもとにあると思われる。

モステルトはまず、この共同研究の対象を、コミュニケーション、リテラシー、オラリティの三つとし、リテラシーとオラリティの概念の拡大と二項対立的図式の廃棄を宣言する。コミュニケーションについては、社会学や情報学の定義も念頭におきつつも、歴史学においては、政治的・象徴的コミュニケーションとしての広義の儀礼に関心が集まっているとする。他方、関係の諸概念については、他の諸語にはそのままでは翻訳困難な用語法ながら、ドイツ学派の貢献が大きく、その例として、*Schriftlichkeit*、*pragmatisch*、*Lebenspraxis*、さらには *Schriftlichung* と *Schriftung* との区別などをあげる。これまでの成果としては、モステルトは、以下の諸点を指摘する。文字の実務での意味、史料学研究の

重要性の確認、非文字史料研究の高まり、口頭と書かれた口頭行為との関係への着目などが重要な論点であり、他方、とりわけ研究が盛んなテーマとしては、言語、教育、宗教、記憶などがあげられる。最後に、今後の展望として、文字使用の多様性、図像研究、非文字コミュニケーションの文字による描写、文字史料の後世での伝来と利用、テキスト編成などがある。

2) 1997年と98年、ドイツとフランスの中世史家たちは、それぞれの研究の現状を相互に紹介し合う研究会を設けたが、この際、ドイツ側はテーマとして提示した7項目の一つに「口頭と書き物 *l'oral et l'écrit*」を設け、ミュンスター学派の総帥ケラーとならんで、クッヘンブッフが報告を努めた。このうち、「いくつかの補足と深化」という副題を持つ後者の報告は、問題関心と方法論という意味で、きわめて興味深い指摘を含んでいる。

報告は、三つの特定問題群の検討と今後の展望からなる。第一は、「物質性 *materialité*」である。受容理論やメディア論の影響のもと関心が高まったこの問題群では、伝統的史料学が知見と方法論的考察を蓄積してきたが、レイアウトや諸記号などのテキスト編成、印章や、ミニアチュール、装飾などの「レフェランス図像」解読などが指摘され、今後は、視覚や聴覚、まなざし、身体等の歴史へ発展するという。第二の「動機とジャンル」については、11世紀末以降の文字の爆発的増加が、一方では新しい文字ジャンルを、他方では非文字メディアとの多様な複合を生み出したことを前提に、文化記憶とコミュニケーションの双方で社会秩序の編成にどのような変容が生じたかが問われる。この際、宮廷や教会、都市、大学などの「場」や、法をめぐるラテン語と俗語の問題の重要性が指摘される。

しかしながら、クッヘンブッフ報告がもっとも興味深いのは「相互理解の社会実践 *praxis communicative*」と題された第三の問題群である。ここでは、パフォーマンス、受容、再コード化、利用、レフェランス機能、相互作用、展示・演出 *mise en scène*、再コンテクスト化、再配置などの諸概念が腑分けされる一方で、検討課題として以下の諸点が列挙される。口頭所作と文字の関係は、変化と連続の諸相が観察されるが、基本的には、口頭が支配的な社会と、文字の文化的ヘゲモニーが確認される社会という二つの極の間のヴェクトルの評価が問題となる。具体的には、法慣習や政治記憶、政治的決定等をめぐる口頭所作と文字、ラテン語と俗語の関係、さらには、農民の知識蓄積や伝達、噂、商業文書、俗語文学等に関する言語表現 *registre*、語彙、有効性保証の様式、制度化などの観点からの研究が要請され、これをクッヘンブッフは「意味行為の考古学 *archéologie du langage*」と呼ぶ。最後に、情報の社会的利用と伝来の問題がある。ここでは、ある情報の変容連鎖や、そのメタ処理様式（編纂、分類、検索など）、さらには実務と神聖化、文字化出来ない情報のあり方などが問題となる。クッヘンブッフは、最後に、今後の展望として、時間的変化、とりわけ重要な特定の「場」、計量問題（度量衡、貨幣、計算道具など）、廃棄や忘却、そして、あるテキスト（作品）という観念が、テキスト類型の弁別や、

本文と注釈との共犯関係によって紡がれてきたのは、テキスト文化と権力との特殊西欧的関係の産物であることを論じて、報告を終える。

## おわりに

リテラシー研究は、もはや「文字の読み書き」研究ではなく、広義のコミュニケーション、記号論研究として再定義されたことは疑いえない。したがって、刷新されたテキスト研究とは、そのコンテクスト、意味を発生させる諸条件・環境研究として、事実上一体の関係にあるといえよう。そこでは、コードの解読格子・準拠枠から、社会的権力磁場にいたるすべてが考察の対象となる。

他方で、個別の他者研究であるほかない歴史学においては、リテラシー研究もまた、「普遍文法」の確定ではなく、無限に多様な語用論的世界にとどまるであろう（「弱い理論」）。この立場にたつ限り、研究対象はつねに、具体的実践と解釈の多様性がせめぎ合い、「場」や共同体自体が不断に再編されるダイナミズムのただ中に置かれていると考えねばならない。

最後に、リテラシー研究は、「意味が紡がれる現場」を直接考察するがゆえに、そこでの知見や省察が、歴史学、さらには学問全般の営為のあり方に直接跳ね返るという性格を有していると考えられる。意味の多様性・重層性と行為実践の現場に置かれているのは、研究対象（ばかり）ではなく、研究者自身であるからである。

**参考文献**（研究史を再考するために有益で、狭義の専門家以外にも参考になるとと思われるものを主として選択した）

### 1. 概観、学界動向

BAUML, F. H., Varieties and consequences of medieval literacy and illiteracy, in *Speculum*, 55, 1980, pp.237-65.

BRIGGS, C. F., Historiographical essay: Literacy, reading, and writing in the medieval West, in *Journal of Medieval History*, 26, 2000, pp.397-420.

CAVALLO, G. et CHARTIER, R., éd., *Histoire de la lecture dans le monde occidental*, Paris, 1997. (田村毅他訳『読むことの歴史』、大修館書店、2000年)

CHASTANG, P., Cartulaires, cartularisation et scripturalité médiévale: la structuration d'un nouveau champ de recherche, dans *Cahiers de civilisation médiévale*, 49, 2006, pp.21-32.

- CHINCA, M. et YOUNG, C., Orality and Literacy in the Middle Ages, in *Orality and Literacy in the Middle Ages. Essays on a Conjunction and its Consequences in honor of D. H. Green*, ed. by M. CHINCA and C. YOUNG, Turnhout, 2005, pp.1-15.
- GENET, J. -P., Histoire et système de communication au Moyen Age, dans *L'histoire et les nouveaux publics dans l'Europe médiévale (XIIIe-XVe siècles). Actes du colloque international organisé par la Fondation Européenne de la Science à la Casa de Velasquez, Madrid, 23-24 avril 1993*, éd. par J.-P. GENET, Paris, 1997, pp.11-29.
- GENET, J.-P., *La mutation de l'éducation et de la culture médiévales. Occident chrétien (XIIIe siècle - milieu du XVe siècle)*, Paris, 1999. 2 vol.
- INNES, M., Memory, Orality and Literacy in an Early Medieval Society, in *Past and Present*, 158, 1998, pp.3-36.
- KELLER, H., L'oral et l'écrit, dans *Les tendances actuelles de l'histoire du Moyen Age en France en Allemagne. Actes des colloques de Sèvres (1997) et Göttingen (1998) organisés par le C.N.R.S. et le Max-Planck-Institut für Geschichte*, éd. par J.-C. SCHMITT et O. G. OEXLE, Paris, 2003, pp.127-142.
- KUCHENBUCH, L., Ecriture et oralité. Quelques compléments et approfondissements, dans *Les tendances actuelles de l'histoire du Moyen Age en France en Allemagne. Actes des colloques de Sèvres (1997) et Göttingen (1998) organisés par le C.N.R.S. et le Max-Planck-Institut für Geschichte*, éd. par J.-C. SCHMITT et O. G. OEXLE, Paris, 2003, pp.143-165.
- MARTIN, J.-M., *Histoire et pouvoirs de l'écrit*, Paris, 1988; 2e éd., 1996.
- MOSTERT, M., What happened to literacy in the Middle Ages? Scriptural evidence for the history of the western literate mentality, in *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 108-3, 1995, pp.323-335.
- MOSTERT, M., New Approaches to Medieval Communication?, in *New Approaches to Medieval Communication*, ed. by M. MOSTERT, Turnhout, 1999, pp.15-37.
- SOT, M., BOUDET, J.-P. et GUERREAU-JALABERT, A., éd., *Histoire culturelle de la France. t. I. Le Moyen Age*, Paris, 1997.
- 岡崎敦「2006年度歴史学研究会大会・合同部会「前近代におけるメディア」コメント・いまなぜメディア研究か ―問題関心の背景と研究の展望―」、『歴史学研究』820号（増刊号）、2006年10月、167-169頁。
- 岡崎敦「史料論のいま」、「文字史料 ―西欧中世における文字テキストと読書行為―」、『九州歴史科学』34号、2006年11月、70-78頁。
- 岡崎敦「写本（ヨーロッパの）」、『歴史学事典15 コミュニケーション』、弘文堂、2008年、295-298頁。

## 2. ユトレヒト大学リテラシー研究シリーズ（特に重要と思われるものにかぎる）

1. MOSTERT, M., ed., *New Approaches to Medieval Communication*, Turnhout, 1999.

3. JONES, S. R., ed., *Learning and Literacy in Medieval England and Abroad*, Turnhout, 2003.
5. HEIDECKER, K., ed., *Charters and the Use of the Written Word in Medieval Society*, Turnhout, 2000.
6. ARLINGHAUS, F.-J., ed., *Transforming the Medieval World: uses of pragmatic literacy in the Middle Ages*, Turnhout, 2006.
8. HAGEMAN, M. and MOSTERT, M., ed., *Reading images and texts: medieval images and texts as forms of communication. Papers from the Third Utrecht Symposium on Medieval Literacy, Utrecht, 7-9 December 2000*, Turnhout, 2005.
9. ADAMSKA, A. and MOSTERT, M., ed., *The Development of Literate Mentalities in East Central Europe*, Turnhout, 2004.
12. CHINCA, M. and YOUNG, C., ed., *Orality and literacy in the Middle Ages: essays on a conjunction and its consequences in honour of D. H. Green*, Turnhout, 2005.
13. SCHULTE, P., MOSTERT, M. and VAN RENSWOUD, I., ed., *Strategies of Writing: Studies on Text and Trust in the Middle Ages. Papers from "Trust in Writing in the Middle Ages" (Utrecht, 28-29 November 2002)*, Turnhout, 2008.

### 3. 各論

- BANNIARD, M., Parler en l'an mil: la communication entre instularisme et flexibilité langagiers, dans *Hommes et Sociétés dans l'Europe de l'An Mil*, éd. par P. BONNASSIE et P. TOUBERT, Toulouse, 2004, pp.333-350.
- BILLER, P. and HUDSON, A., ed., *Heresy and Literacy, 1000-1530*, Cambridge, 1994.
- CHARTIER, R. et MARTIN, H.-J., éd., *Histoire de l'édition française, \*Le livre conquérant. Du Moyen Age au milieu du XVIIe siècle*, Paris, 1982.
- CHARTIER, R., *Inscrire et effacer*, Paris, 2005.
- COLEMAN, J., *Public reading and the reading public in late medieval England and France*, Cambridge, 1996.
- CONTRENI, J. J. and CASCIANI, C., ed., *Word, Image, Number. Communication in the Middle Ages*, Turnhout, 2002.
- COQUERY, N., MENANT, F. et WEBER, F., éd., *Ecrire, compter, mesurer. Ver une histoire des rationalités pratiques*, Paris, 2006.
- GEARY, P. J., Land, Language and Memory in Europe, 700-1100, in *Transactions of the Royal Historical Society*, 6th series, IX, 1999, pp.169-184.
- GENET, J.-P., éd., *L'histoire et les nouveaux publics dans l'Europe médiévale (XIIIe-XVe siècles). Actes du colloque international organisé pr la Fondation Européenne de la Science à la Casa de Velasquez, Madrid, 23-24 avril 1993*, Paris, 1997.
- GIVEN, J. B., *Inquisition and Medieval Society: Power, Discipline and Resistance in Languedoc*, Ithaca, 1997.

- GOODY, J., *The Logic of Writing and the Organization of Society*, Cambridge, 1986; repr., Newcastle upon Tyne, 1996, .
- GREEN, D. H., *Medieval Listening and Reading. The Primary Reception of German Literature 800-1300*, Cambridge, 1994.
- GREEN, R. F., *A Crisis of Truth: Literature and Law in Ricardian England*, Philadelphia, 1999.
- GUTH, D. J., Introduction: Formulary and literacy as keys to unlocking late-medieval law, dans *Écrit et pouvoir dans les chancelleries médiévales: espace français, espace anglais. Actes du colloque international de Montréal, 7-9 septembre 1995*, éd. par K. FIANU et D. J. GUTH, Louvain-la-Neuve, 1997, pp.1-12.
- HAVELOCK, E., *Preface to Plato*, London, 1963. (村岡晋一訳『プラトン序説』、新書館、1997年)
- JOUET, V., *Et un temps pour parler... La communication orale sous le règne de Charles VI: le témoignage de la Chronique du religieux de Saint-Denis*, Paris, 2002.
- MACLUHAN, M., *Understanding Media: the Extensions of Man*, New York/London, 1964. (栗原裕、河本仲聖『メディア論』、みすず書房、1987年)
- MCKITTERICK, R., *The Carolingians and the written word*, Cambridge, 1989.
- MCKITTERICK, R., ed., *The Uses of Literacy in Early Mediaeval Europe*, Cambridge, 1990.
- MCKITTERICK, R., *History and memory in the Carolingian World*, Cambridge, 2004.
- MENACHE, S., *The Vox Dei. Communication in the Middle Ages*, New York/Oxford, 1990.
- MENANT, F., Les transformations de l'écrit documentaire entre le XIIe et le XIIIe siècle, dans *Écrire, compter, mesurer. Vers une histoire des rationalités pratiques*, éd. par N. COQUERY, F. MENANT et F. WEBER, Paris, 2006, pp.33-50.
- MEWS, C. J., Orality, Literacy, and Authority, in *Exemplaria*, 2, 1990, pp.475-492.
- MOORE, R. I., *The Formation of a Persecuting Society. Power and Deviance in Western Europe 950-1250*, Oxford/Cambridge, 1987.
- ONG, W. J., *Orality and Literacy: the Technologizing of the Word*, London/New York, 1982. (桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』、藤原書店、1991年)
- PARKES, M. B., *Scribes, Scripts and Readers. Studies in the Communication, Presentation and Dissemination of Medieval Texts*, London / Rio Grande, 1991.
- PARKES, M. B., *Pause and Effect. An Introduction to the History of Punctuation in the West*, Bournemouth / Cambridge, 1992.
- PETRUCCI, A., *Writers and Readers in Medieval Italy. Studies in the History of Written Culture*, ed. and transl. by Ch. M. Radding, New Haven / London, 1995.
- REYNOLDS, S., *Medieval Readings. Grammar, Rhetoric and the Classical Text*, Cambridge, 1996.
- STOCK, B., *The Implications of Literacy. Written Language and Models of Interpretation in the Eleventh and Twelfth Centuries*, Princeton, 1983.

- STOCK, B., *Listening for the Text: on the Uses of the Past*, Philadelphia, 1990.
- THANE, P. M., Oral History, Memory and Written Tradition: an Introduction, in *Transactions of the Royal Historical Society*, 6th series, IX, 1999, pp.161-168.
- WOOD, A., Custom and the Social Organisation of Writing in Early Modern England, in *Transactions of the Royal Historical Society*, 6th series, 9, 1999, pp.257-269.
- ZIMMERMANN, M., éd., *Auctor et Auctoritas. Invention et conformisme dans l'écriture médiévale. Actes du colloque de Saint-Quentin-en-Yvelines (14-16 juin 1999)*, Paris, 2001.
- ZIMMERMANN, M., *Ecrire et lire en Catalogne (IXe-XIIIe siècle)*, Madrid, 2003. 2.
- ZIMMERMANN, M., Ecrire en l'An Mil, dans *Hommes et Sociétés dans l'Europe de l'An Mil*, éd. par P. BONNASSIE et P. TOUBERT, Toulouse, 2004, pp.351-378.
- ZUMTHOR, P., *La lettre et la voix. De la «littérature» médiévale*, Paris, 1987.